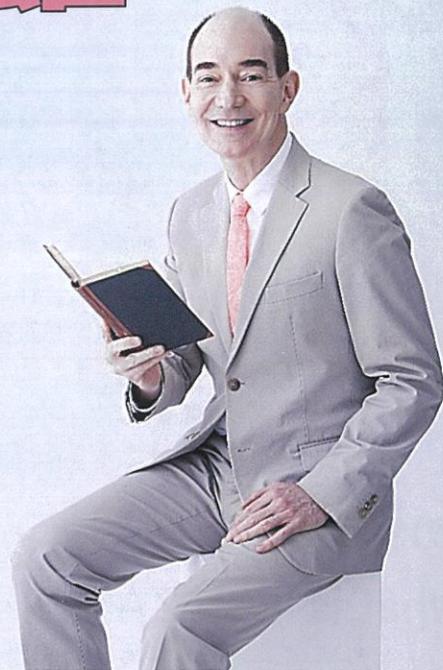


# 谷崎記念館だより

第33回残月祭  
ロバート・キャンベル講演会



## 「青い花」の長い散歩

—大正期の谷崎文学と「都市」について—

文豪谷崎を偲び、誕生日を祝う「残月祭」。今年度も7月24日に、芦屋ルナホールにて開催、253名の観衆が集った。この催しを始められたご遺族の渡辺千萬子さんが4月にご逝去され、追悼の意を込めて行われた。

今回は日本文学研究者のロバート・キャンベルさんをゲストにお迎えし、谷崎の大正期の作品を読み解いて頂いた。「痴人の愛」の先駆けと捉えた短編小説「青い花」(大正11年)を取り上げて、作品に描かれた主人公岡田の、若い恋人阿具里への妄想を膨らませて衰弱していく精神状態や、痩せ衰えていく身体の様相を、二人が歩く銀座の街の描写と合わせて分析された。また、写真スライドで、明治から昭和初期における銀座の街の変容を解説された。

さらに、谷崎の妻松子夫人との交流や、『春琴抄』の漆塗本をめぐる逸話なども紹介され、会場の観客は熱心に聴き入っていた。



ロバート・キャンベル氏

# 2019年度の展示室



## 春の特別展

### 「スキャンダル～噂の文豪～」

(4月13日～6月30日)

文豪谷崎潤一郎も、スキャンダルの主人公として世間を騒がせまた醜聞めいた人間関係の中に少なからず身をおいた。が、そこは文豪。複雑に交錯する人間関係のテンションを創作へのインスピレーションへと変換させていった。まともに受けとめたならば、耐えられそうにもない愛憎の渦を、谷崎はみずから巻き起こしどきに操りつつ書きとめていったかのようにもみえる。谷崎にとっての現実とは、作品のために企てられた虚構だったのだろうか？谷崎をめぐる生の人間関係に隠された名作誕生の秘密を、浮き彫りにした。

## 秋の特別展

### 「What is TANIZAKI?～多面体の文豪～」

(9月14日～12月8日)

日本の近代文学を代表する文豪・谷崎潤一郎。その生涯は80年にも及び、作家としてのキャリアも、半世紀をこえる。死の直前まで筆を放さず第一線で書き続け、膨大な数の傑作群を生み出した。まさに「大谷崎」と呼ばれるにふさわしい、堂々たるボリュームの人生である。それだけに谷崎には、人間としても、またその作品世界を見渡しても、様々に表情豊かな顔がある。「マザーコンプレックス」「マゾヒスト」「耽美主義者」「食通」「猫好き」・・・。万華鏡の中で千変万化に乱れ咲く虚構の花にも似た、多面体の文豪「谷崎潤一郎」を解体し再構成した。



## 夏の特設展

### 「歌人」谷崎潤一郎」

(7月6日～9月8日)

谷崎の和歌には、じかに話しかけてくるような独特的の風がある。そんな肉声にも似た歌々を、文豪の肉筆の味わいとともに展示。



## 冬の特設展

### 「潤一郎、The show time!!」

(12月14日～2020年3月8日)

谷崎の作品群は、映画・演劇等に数多く翻案されてきた。そんな「エンターテイメントの文豪」という視角から、谷崎の文学を見渡した。

# 展示関連等講演会・講座



## 【特別展・特設展関連講演会】(於:谷崎記念館)

5月26日に堀江珠喜氏（大阪府立大学教授）による春の特別展関連講演会「谷崎のアブない世界」、8月24日には楠田立身氏（歌人・日本歌人クラブ）による夏の特設展関連講演会「文豪の大らかな調べ」が催された。

## 【芦屋市文化ゾーン講座】(2019年3月12日、於:芦屋市立美術博物館)

谷崎記念館からの学芸員講演では、春の特別展「スキャンダル」に絡めて、芦屋～阪神間に暮らした時代の谷崎をめぐる危うい人間模様が、芦屋の地域性を背景にしつつ描き出された。

## 【谷崎記念館・芦屋市立美術博物館合同公開セミナー】

(8月23日、於:芦屋市民センター)

谷崎記念館からの学芸員講演は、夏の特設展「歌人 谷崎潤一郎」を題材に、谷崎の和歌の特色を紐解き、それが、古典以来の「歌物語」の伝統の上にあることを示したもの。

## 【夏休み子ども講座】(8月17日、於:谷崎記念館)

「文学館を探検しよう！～見て・聞いて・レポート作り～」。

小学生たちが、学芸員の解説を聞きながら谷崎記念館を探検、レポートにまとめた。

# 2020年の展示スケジュール



## 春の特別展

「潤一郎の美術展～文豪ゆかりの＜美＞に浸る～」4月1日(水)～6月7日(日)  
谷崎ゆかりの数々の名画・名品を贅沢に展示。様々な視点から、文豪の「美」の世界に迫る。

## 夏の特設展

「大谷崎と文豪たち」6月13日(土)～9月6日(日)

谷崎は、さまざまな文豪と交流し創作の糧とした。こうした交流と影響関係を、当館所蔵資料から紹介する。

## 秋の特別展

「タブー～発禁の誘惑～」9月12日(土)～12月6日(日)

谷崎は、歴史の流れや社会の規範との摩擦から、時に発禁の憂き目に遭いながらも作家として生き延びてきた。谷崎独特の、世の中のタブーとの絶妙の距離感を浮き彫りにする。

## 冬の特設展

「初版本 on パレード～名作たちのデビュー～」12月12日(土)～2021年3月7日(日)

名作たちにとって、初版本は、一度きりの「デビュー」の晴れ舞台。念入りな装いが施された、谷崎作品初版本の数々を楽しむ。

# 「潤一郎あれこれ」

館蔵 「源氏物語屏風切」

—芦屋の侘び住いと「谷崎源氏」の絢爛—



俵屋宗達「源氏物語屏風切」（谷崎記念館所蔵）

昭和9（1934）年、人妻だった根津松子との恋を実らせた谷崎は、彼女とともに芦屋打出の家（現芦屋市宮川町4丁目）に移る。「姦通罪」というものがあった時代、世間をはばかる二人の隠れ家である。この頃の谷崎は、作家生活のなかでも、もっとも貧しい時期のなかにあった。この家で書かれ、やはり芦屋を舞台とした「猫と庄造と二人のおんな」は、そんな暮しぶりのせいでもあるのか、谷崎にはめずらしい庶民的な生活感にあふれた作品である。

一方、その貧窮のなかで、源氏物語の口語訳「谷崎源氏」の執筆が始まる。

この家には、松子のみならず、その姉妹、娘をも呼び寄せた。部屋ごとに彼女たちを住まわせ、折にふれては訪れる谷崎。さながら、美女たちを愛（め）でまわる光源氏の境地だったか。

そんな谷崎の書斎に掛けられていたのが、この「源氏物語屏風切」である。「屏風切」とは聞き馴れないが、源氏物語54帖の各場面が描き込められた屏風から切り取られ、画軸に仕立てたところから名づけられた。日本画の大家・安田敦彦が筆をとった箱書きの由緒によると、団家（血盟団事件で暗殺された戦前の実業家団琢磨の家）旧蔵の屏風の一部だった。俵屋宗達の手になるこの大和絵の名品は、高価な顔料であった緑青や金泥をふんだんに使った贅沢なつくり。場面は「須磨」で、切り離された散り散りの54帖のうち、所在の明らかになっている20余帖のなかの一つである。

源氏絵の絢爛は、侘び住いを彩った女たちともども、谷崎源氏の執筆をさきえた道具立てでもあったのだろう。

（芦屋市谷崎潤一郎記念館井上勝博）

※「源氏物語屏風切」は2020年春の特別展に出品されます。

※谷崎が暮らした「芦屋打出の家」は、芦屋ゆかりの詩人・富田碎花の旧居で、今は無料公開されています。

（日・水曜の10～16時開館。入館は15時まで）



谷崎が住んだ芦屋打出の家  
(現「富田碎花旧居」)

谷崎記念館だより 2019

2020年3月31日発行（初版第1刷）

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 芦屋市伊勢町12-15

Tel 0797-23-5852 fax 0797-38-3244

HP : <https://www.tanizakikan.com/>

